

「賀川豊彦のお宝発見」その3

新聞記事にみる賀川豊彦 (38)

1910 (明治43) 年~1963 (昭和38) 年 (神戸版)

第38回 「福音学校の立体農業」

「香川県小豆郡の立体農業」

1955 (昭和30) 年7月17日「神戸新聞」

福音学校 香川小豆郡の立体農業

◇…山地開墾の熱心な提唱者の一人に賀川豊彦氏がいる。賀川氏は説明するまでもなく有名な宗教家であるが、氏の山地開墾論はちょっと変っている。氏は立体農業という言葉をつかっておられるが、山を開墾したときには平地の農作物をそのまま山へ移してはだめだと主張している。麦やサツマイモ、陸稲などを山地で栽培する場合、平地同様必ず地面を耕さなければならぬが、そうすると雨で表土が流されてしまう。したがって長年月のうちには荒廃した山が残るのみになる。これに対し立体農業による開墾の第一着手は半ば野生的なクルミ、クリ、カキ、ペカン(クルミの一種)などを山に植えることだと説いている。これら山に植えたときには、毎年表土を耕す必要はない。従って表土は流失せず国土は保全される。しかも凶作時はこれらの樹木から得られる果実はよいタンパク資源や栄養資源となる」というのが賀川氏の主張である。この賀川氏の主張を実際にうつつして研究し

県外ではこうやっている

産業現地報告

山地で果樹増産

クローバーなど茂らし 表土の流失を防ぐ

ているのが、ここにとりあげた農民福音学校＝香川県小豆郡豊島村＝である。

◇…学校といえは何か形式ばったものを感じるが、ここでは学校というよりむしろ塾である。

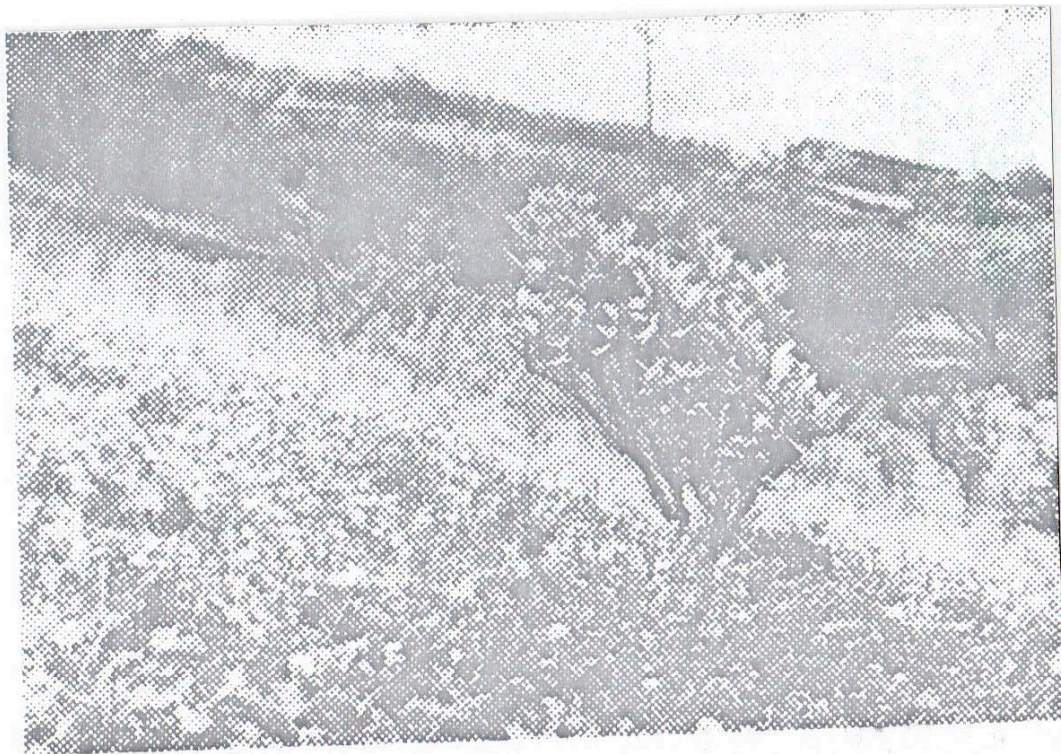
牧師さんの藤崎盛一氏(五)を中心に全国各地から集った塾生が十名ばかりクワをとり、家畜の世話をしている。前は東京の近郊にあったのだが、都会の近くで雑音が多すぎるため、この瀬戸内海の孤島に移ったそうであ

る。カキ一町二反、ミカン六反、リンゴ五反、オリブ、クルミ、ペカンが若干——これがこの立体農業の中心である。このほかに水田四反三畝、畑四反、肥料木(イタチハギ、チントウトゲナシアカシヤ)二反、未開地一町五反がある。家畜は乳牛

二頭、和牛一頭、ブタ二頭、ヤギ三頭、メンヨウ四頭、ニワトリ若干が飼育されている。藤崎氏がちょうど九州へ講演に出かけられたあとだったので、技術

面についてくわしく聞くことができなかったが、果樹園をみたり、塾生から聞いたことを総合してみよう。

◇…まず第一に目につくのは表土の流失が全くといってよいほどない。カキ、ミカンは二十年以上もの樹齢をもっているが根は完全に土中にうずもれている。淡路のミカン園などでは二十年生以上ともなると、タコノ足のように地面から根が露出しているのが普通である。いやて



クローバーにおおわれたミカン園

の福音学校のすぐ隣りのミカン園では、階段状に整地されているので、ほとんど水平に近い傾斜であるにもかかわらず、樹木の根本のところはやはりタコの足のようになっている。ところがこの福音学校のミカン園は十五度からひどいになると三十五度ぐらいの傾斜地であるにもかかわらず、完全に表土が保全されている。果樹園の表土流出防止は最近やかましくいわれたしたが、隣り合せでありながらどうしてこのような開きができたかといえば学校のそれはホワイトクローバー、クリムソックローバー、ヤハズソウなどで表土が完全に被覆されているからである。これは果樹園内全部に

茂らすには種子をまいたり、移植したりして、最初は相当努力を要したようであるが、一たん被覆してしまえば、あとはそう大した労力も必要としない。賀川氏の立体農業提唱の第一理由である表土流失防止はかくて完全に目的が果されている。少し余談になるが、わが国の果樹栽培学はフランス系の流れをくんでおり、地中海沿岸の非常に雨量の少いところの栽培方法が骨子になっている。園内に草一本もはやしてはならないと指導されてきたが、最近逆は草で表土を被覆した方がよいのではなにかとの説が有力になり、どんな草をどのように茂らすかについては愛媛県立農試でここ二、

三年來試験を行っている。

◇…ところで草をはやさないより、必要な草をはやしておく方がよほどむずかしい。さきにも述べたようにクローバー類は一度活着するとそう簡単に死滅するものではないが、この間に雑草がどうしてもはびこる。この退治がむずかしい。ちょっと油断していると、すぐ頭を出してくる。クローバーがはえてるので除草剤を利用することもできない。藤崎さんが先だって外遊の際、塾生を半分の五人に減したそうだが、労力不足で雑草がものすごくはびこったそうである。学校帰りの中学生が

「立体農業とは雑草をはやすことか」などと悪口をいってとおることがあるとか。第三の点として山地開発には相当な労力を必要とし、これを管理するにもまた多大の労力を要する。このためできるだ手の省ける樹木を選ぶべきで、半ば放任しておいても成長するようなものがよいそれにはクルミ、ペカン、クリなどが適当ではないだろうか。

◇…兵庫県では阪本知事の提唱で山地開発をすすめるべく、ブルドーザーまで購入しているササ類をひっこぬき、表土を掘りかえすだけなら、ブルドーザーで簡単にできるが、どうして

表土を保全するか、ウサギやイノシシの害をどうするかとなる
と非常に困難をともなう。とにかく山地開発では平地の草本農業をそのまま移しては必ず失敗するとみてよい。この点立体農業は大いに参考になり、また研究の必要があろう。(武内)

県外ではこうやっている

産業現地報告

福音学校（香川県小豆郡）の立体農業

- ◆ 山地開発の熱心な提唱者の一人に賀川豊彦氏がいる。賀川氏は説明するまでもなく有名な宗教家であるが氏の山地開発論はちょっと変っている。氏は立体農業という言葉をつかっておられるが、山を開発したときには平地の農作物をそのまま山へ移してはだめだと主張している。麦やサツマイモ、陸稲などを山地で栽培する場合、平地同様必ず地面を耕さなければならないが、そうすると雨で表土が流されてしまう。したがって長年月のうちには荒廃した山が残るのみになる。これに対し立体農業による開発の第一着手は半ば野生的なクルミ、クリ、カキ、ペカン（クルミの一種）などを山に植えることだと説いている。これらを山に植えたときには、毎年表土を耕す必要はない。従って表土は流失せず国土は保全される。しかも凶作時はこれらの樹木から得られる果実はよいタンパク資源や栄養資源となる—というのが賀川氏の主張である。この賀川氏の主張を実際にうつして研究しているのが、ここにとりあげた農民福音学校＝香川県小豆郡豊島村＝である。

山地で果樹増産

クローバーなど茂らし

表土の流失を防ぐ

- ◆ 学校といえど何か形式ばったものを感じるが、ここは学校というよりむしろ塾である。牧師さんの藤崎盛一氏（五二）を中心に全国各地から集った塾生が十名ばかりクワをとり、家畜の世話をしている。前は東京の近郊にあったのだが、都会の近くで雑音が多すぎるため、この瀬戸内海の孤島に移ったそうである。カキ一町二反、ミカン六反、リンゴ五反、オリーブ、クルミ、ペカンが若干 — これがここの立体農業の中心である。このほかに水田四反三畝、畑四反、肥飼料木（イタチハギ、チントウ、トゲナシアカシヤ）二反、未開地一町五反がある。家畜は乳牛二頭、和牛一頭、ブタ二頭、ヤギ三頭、メンヨウ四頭、ニワトリ若干が飼育されている。藤崎氏がちょうど九州へ講演に出かけられたあとだったので、技術面についてくわしく聞くことができなかったが、果樹園をみたり、塾生から聞いたことを総合してみよう。
- ◆ まず第一に目につくのは表土の流失が全くといってよいほどない。カキ、ミカンは

二十年以上もの樹齢をもっているが根は完全に土中にうずもれている。淡路のミカン園などでは二十年以上ともなると、タコの足のようには地面から根が露出しているのが普通である。いやこの福音学校のすぐ隣りのミカン園では、階段状に整地されているので、ほとんど水平に近い傾斜であるにもかかわらず、樹木の根本のところはやはりタコの足のようになっている。ところがこの福音学校のミカン園は十五度からひどいになると三十五度ぐらいの傾斜地であるにもかかわらず、完全に表土が保全されている。果樹園の表土流出防止は最近やかましくいわれだしたが、隣り合せでありながらどうしてこのような開きができたかといえば学校のそれはホワイトクローバー、クリムソンクローバー、ヤハズソウなどで表土が完全に被覆されているからである。これは果樹園内全部に茂らすには種子をまいたり、移植したりして、最初は相当労力を要したようであるが、一たん被覆してしまえば、あとはそう大した労力も必要としない。賀川氏の立体農業提唱の第一理由である表土流失防止はかくて完全に目的が果されている。少し余談になるが、わが国の果樹栽培学はフランス系の流れをくんでおり、地中海沿岸の非常に雨量の少ないところの栽培方法が骨子になっている。園内に草一本もはやしてはならないと指導されてきたが、最近は逆に草で表土を被覆した方がよいのではないかとの説が有力になり、どんな草をどのように茂らすかについては愛媛県立農試でここ二、三年来試験を行っている。

- ◆ ところで草をはやさないより、必要な草をはやしておく方がよほどむずかしい。さきにも述べたようにクローバー類は一度活着するとそう簡単に死滅するものではないが、この間に雑草がどうしてもはびこる。この退治がむずかしい。ちょっと油断していると、すぐ頭を出してくる。クローバーがはえているので除草剤を利用することもできない。藤崎さんが先だって外遊の際、塾生を半分の五人に減らしたそうだが、労力不足で雑草がものすごくはびこったそうである。学校帰りの中学生が「立体農業とは雑草をはやすことか」などと悪口をいってとおることがあるとか。第三の点として山地開発には相当な労力を必要とし、これを管理するにもまた多大の労力を要する。このためできるだけ手の省ける樹木を選ぶべきで、半ば放任しておいても成長するようなものがよいそれにはクルミ、ペカン、クリなどが適当ではないだろうか。
- ◆ 兵庫県では阪本知事の提唱で山地開発をすすめるべく、ブルドーザーまで購入しているササ類をひっこぬき、表土を掘りかえすだけなら、ブルドーザーで簡単にできるが、どうして表土を保全するか、ウサギやイノシシの害をどうするかとなると非常に困難をとまなう。とにかく山地開発では平地の草木農業をそのまま移しては必ず失敗するとみてよい。この点立体農業は大いに参考になり、また研究の必要があるろう。(武内)